



## やさしい背中、励ます背中

園長 野中 泉

今、私のパソコンには、1分ちょっとの短い動画が保存されています。7月にできる限りの対策と工夫を重ねて決行した5歳児のお泊り保育の夜の様子です。ホールを暗くして真ん中に炎に見立てた赤いライトを囲む予定だったキャンプファイヤー。ホールの暗さが怖くて泣きだした子がいたため、やっぱり電気を点けることにしたところから、その動画ははじまります。背中ごしに撮っているので、ひとりひとりの顔は見えません。けれど、手をつないで輪になった子どもたちが、泣いている友だちに「もう、大丈夫やからな」「大丈夫やで～」「怖くないで～」とあちこちから、自然に声をかけあうその短いひとこまを、私は何度も見ても泣きそうになります。

声をあげた子どもたちの幾人かは、実は自分もへっちゃらではなかったのかもしれないと、その夜のみんなの様子を思い出しながら想像します。自分もちょっと怖いけど、自分だけお母さんと離れているのは少しさびしいけど、それでも目の前で泣いている友だちを気遣い「大丈夫やで」と励ます子どもたちの優しい声と、もしかしたら、友だちを励ますことで自分自身も奮い立たせたのかもしれない小さな背中に胸が熱くなります。目の前の試練を、手をつないだ友だちの支えを頼りに越えていこうとする5歳児たちと、ただ同じ場所に立ち、もう片方の手をつないでそれを見守る大人たち。共につくるその場の確かさと温かさに、ああそうだ、こんな経験を子どもたちに沢山させてやりたいと願うから、私たちは『こんな今』でも、ここでふんばっているんだと、思い出すのです。

テレビやネットのニュースで見るコロナの感染者数は見たこともないような数を更新し続け、落ち着く心配がありません。近隣の町からも感染が出始めたこの数週間の状況は、決して楽観視してはいけなさと緊張感もっています。しかし一方で、感染者の数だけに、ただただ怯え振り回される自分に、気味の悪い違和感も感じています。今、私たちが「感染者」とひとくくりにして怖がったり、迷惑がったりしているその人たちは、誰かの大事な家族や友だちかもしれないのに、そんなあたり前のことを平気で忘れそうになる自分を怖いと感じます。

私たちがウィルスに感染しない、させない努力を続けているのは、共に生きる仲間を気遣い、その「命」を大切にしたいと願っているからではなかったか。病気を隔離し遠ざけることと、病気の人を疎外することがごちゃまぜになってしまう、そんな自分たちを怖いと感じます。

熱や咳でつらい人に「苦しいですね」と声をかけたり、家族が感染し大きな心配の渦中に居る人に「ひとりぼっちにしないよ」と、あたりまえに言えなくなっている自分たちを、ウィルスに感染することと同じくらい怖いと感じます。

今日から8月です。コロナ禍に何もかも覆いつくされそうですが、日本が戦争をした国であることと、もう二度と戦争をしないと決めた国であることをきちんと思い出す季節が、またやってきました。私たちの子どもが誰からも殺されることなく、人殺しにもならない、そんな戦争のない未来は、私の「命」も知らない誰かの「命」も同じように大切にしたい今日にしかつながっていない。自分自身も怖さを抱えながら、友だちを「大丈夫やで」と励ますことができる子どもたちのやさしく強い背中に、いつも以上に問い質されているように感じる、今年の夏です。